

三十三

後鳥羽院御記 卷首圖
着留襪様

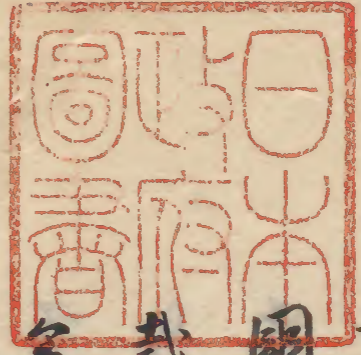
具是とゆとあらき便宜に用ひる所ありし由り今
もといはくそ骨をいれを庭にともも用ひのころむ
もてむまきくし結をいりりくもるせにそれ
及てくわらき中はる縁れきいあはしつめりて
うしりひくは所りす縁れきいあはしつめりて
及てくわらき中はる縁れきいあはしつめりて
のの出来こといりしとく結敷をいりし着る所次
才是右乃着留襪の様昔よりし結法あり

三十三

三十三

我胡息

後白河太上皇專雖興隆我道而未定之式方
今賢名不及和漢之二君愚意只守思弁之一
言深技餘風好而有日然同業受于家名顯于
國之掌推獻高稱之表誤得長老之号今定
裁獲之也示就鞠之人永守法式勿違犯
矣



元五年閏正月 日

右後鳥羽院御紀以常德院教芳翰書寫而卷首殘缺失其題名矣

羣書類從卷第三百五十三

